様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０００６

研究課題名（和文）古代ギリシャの友愛論研究

研究課題名（英文）Friendship in Ancient Greek

研究代表者
相澤　康隆（AIZAWA, Yasutaka）

三重大学・人文学部・准教授

研究者番号：４０６４７１２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、規範倫理学における徳倫理の意義を明らかにし、さらにアリストテレスの友愛論の研究を通じて、有徳な人とはどのような人であるのかを考察した。徳倫理は、有徳な人の行為を正しい行為に結びつける点に特徴がある。では、有徳な人とはどのような人のことをいうのか。本研究では徳倫理の基盤となっているアリストテレス倫理学に注目し、特に彼の友愛論を分析しながら、有徳な人の特徴としての利他性という概念を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this research, I studied on virtue ethics and friendship in the ancient Greek world. The central concept of virtue ethics is a virtuous person, and I argued that a virtuous person is one who does good to people altruistically.

研究分野：哲学

キーワード：友愛　徳倫理

１．研究開始当初の背景

本研究を開始する頃、日本の倫理学研究においては徳倫理に対する注目が急速に高まっていた。

徳倫理とは、西洋近現代の倫理学における二つの伝統と目されるカントの義務論およびJ.S.ミルらの功利主義に対して、二十世紀後半にアンスコムらが復興した第三の立場であり、いまや欧米の現代倫理学において重要な地位を占めている。徳倫理は、「いかに行為すべきか」を主題とする義務論や功利主義とは異なり、「いかなる人間になるべきか」という問題に答えることを主たる課題とする。つまり、行為そのものよりも、行為者に着目する点にその特徴がある。

徳倫理の発展によって、その源泉であるアリストテレス倫理学への関心が近年では非常に高まっている。というのも、有徳な人になることをわれわれ人間の目標として掲げ、有徳であることと幸福な人生を結びつけるアリストテレスの倫理学は、現代の徳倫理にとって理論的支柱になりうることが期待されるからである。つまり、「いかなる人間になるべきか」という問いに対して、「有徳な人間になるべきである」と答え、有徳な人間になるべき理由を本人の幸福という点から説明するアリストテレスの見解は、徳倫理が探究する問題への直接的な回答になるのである。

有徳であることの根幹となる特徴は「利他性」である。つまり、利他的な人間であることが、有徳な人間であることの必要不可欠の条件である。しかし、利他的であることは、本人の幸福につながるのだろうか。つながるとすれば、どのような仕方でつながるのか。これらの疑問は、アリストテレスの倫理学が有徳であることと幸福な人生を結びつける理論であることから生じてくる。こうした疑問に答えるためには、アリストテレスの友愛論を考察することが有益であると考えられる。なぜなら、アリストテレスの友愛論では、有徳な人の利他性が論じられているからである。

以上の考察に基づいて、本研究では現代の徳倫理を基礎づけるために、「有徳な人」という概念を明らかにすることを目指し、その手がかりとしてアリストテレスを中心とする古代ギリシャの友愛論を研究することとなった。

２．研究の目的

（１）欧米と比べて、日本の徳倫理研究が本格化したのはここ数年のことである。欧米の研究では、「徳」、「幸福」、「思慮」、「正しさ」といった基本概念の分析はもちろん、功利主義や義務論と比べたときの徳倫理の魅力や、それらの立場からなされる徳倫理への批判など、ある種の比較研究の蓄積もある。そのような事情に鑑みて、私は本研究の中核である友愛論研究に入る前に、より包括的な視点から徳倫理一般について考察することにした。とりわけ、徳倫理とはそもそも何であるのかという問いと、徳倫理の立場から「正しい行為」はどのように規定されるのかという問いに答えることを本研究の重要な目的に据えた。

（２）徳倫理は、個々の行為の道徳的身分（正しい行為か間違った行為か、賞賛に値する行為か非難に値する行為かなど）にも関心を払わないわけではないが、それ以上に、個々の行為を行う「行為者の性格」にいっそう注目する。そして、行為者がどのような人間であるのかということが、行為の正不正や賞賛・非難の可能性にもかかわってくるとみなす。徳倫理の起源であるアリストテレスの倫理学ではこのような「行為者への注目」がどのように論じられているのだろうか。この問いに答えるために、私はアリストテレスの『ニコマコス倫理学』における道徳責任論に注目し、彼の見解の特徴となる一側面を明らかにすることにした。

（３）有徳な人間とはどのような人のことを指すのか。現代の徳倫理の中核となる概念が「有徳性」である以上、徳あるいは有徳な人物について考察する必要があることは明らかである。アリストテレスは、『ニコマコス倫理学』においても『エウデモス倫理学』においても、有徳な人間とはどのような人であるかについてまとまった議論は展開しておらず、断片的な論述があるのみである。

もっとも、『ニコマコス倫理学』第八巻と第九巻における友愛論では、友愛のひとつの形態として「有徳な人間同士の友愛」が語られ、有徳な人間とはどのような人なのかがある程度説明されている。そこで、本研究では、アリストテレスの友愛論の分析を通じて、有徳な人間についてのアリストテレスの見解を明らかにすることにした。

３．研究の方法

本研究は、現代の倫理学研究に目を向けながらも、主要な目的は古典テクストの研究である。そこで、文献学的なアプローチが本研究の中心となる。すなわち、複数の校訂本の読みを比較し、テクスト本来の姿を可能な限り復元することを試み、さらに各国語で書かれた注釈を参照しながら、アリストテレスの真意を明らかにするという方法である。

また、近年の徳倫理研究を日本に紹介することも本研究の重要な一部である。そこで、最新の論文集の翻訳を通じて、徳倫理とはどのようなものであり、どのような可能性が含まれているのかを紹介することにした。

４．研究成果

（１）徳倫理は正しい行為をどのように説明するのか。私はこの問題を「徳倫理学と正しい行為」において考察した。概略は以下のとおりである。

正しい行為（なすべき行為）とはいかなる行為かを説明することは規範倫理学の諸理論にとって重要な役割の一つである。規範倫理学における一つの理論ないし立場である徳倫理は、正しい行為を説明することができるのだろうか。この疑問に対して、いわゆる「適格な行為者説」は、次のような仕方で正しい行為の必要十分条件を与える。「ある行為が正しいのは、その行為が、有徳な行為者であれば当該の状況において特徴的に行いそうなことである場合であり、かつその場合に限られる」。有徳な人の行為を正しい行為の規準とするこの定式に対して、主要な反論が二つある。一つは、「有徳な人ならば決して陥らない状況に陥った行為者に対して、この定式は何をなすべきかを教えてくれない」という反論であり、もう一つは、「有徳でない行為者には、まさに有徳ではないがゆえになすべき行為があるにもかかわらず、この定式ではその事実を説明することができない」という反論である。これらの反論を踏まえて、定式に含まれる「有徳な行為者であれば行いそうなこと」を「有徳な人であれば忠告しそうなこと」に修正する試みがあるが、この修正版も固有の難点を抱えている。

そこで私は、「有徳な人の行為」ではなく、「徳を備えた行為」を中心に据えて定式を作り変えることを提案した。すなわち、「ある行為が正しいのは、その行為が当該の状況において求められる徳を備えた行為である場合であり、かつその場合に限られる」。このように定式化することによって、上記の二つの反論を退けつつ、徳倫理の立場から正しい行為の説明を与えることができるのである。

（２）徳倫理では行為者の性格が重視される。その考え方の具体例として、私はアリストテレスの道徳責任論に注目し、行為の賞賛可能性と非難可能性を通時的な観点からとらえるアリストテレスの考え方を明らかにした（拙論「行為の起源と行為者の自由：アリストテレスの道徳的責任論における混合的行為をめぐって」）。概略は以下のとおりである。

ある行為者が何らかの悪しき行為をした場合、その人が非難に値するとされるのは、その人がその行為をすることもしないこともできた場合に限られる。たとえば、いじめられている友人を私が助けなかったとしよう。そのことに関して私が非難に値するとすれば、その根拠は、「助けようと思えば助けることもできたのに、そうしなかった」という点にある。

しかし、仮に私が極端に臆病な人間で、いじめられている人を助けることなど到底できないような性格であったとしたらどうだろうか。つまり、私は友人を助けようと思っても、助けることはできなかったのである。この場合、「そうしようと思えば、そうすることもできた」という条件が満たされていないのだから、私は非難に値しないことになるのだろうか。

ここで重要なのは、行為そのものや行為を行った時点の行為者だけに注目するのではなく、行為者の性格の通時的な形成に着目する視点である。つまり、先ほどの例でいえば、私ははじめから臆病な性格であったわけではなく、臆病な行為を繰り返すことによって、そうした性格を身につけたのである。臆病な性格が形成される前の時点、すなわち臆病な行為を繰り返す時点では、私はそのような行為をしないこともできた。したがって、そうした性格を身につけたことに関して私は非難に値する。だとすれば、臆病さのゆえに友人を助けなかったという行為に関しても、私には何の責任もないとは言えないことになる。

このように、行為者の性格の通時的な形成に着目することによって、個々の行為の非難可能性についても新たな視点をもたらすことができるのである。

（３）友愛論については、「どのような友人をどれくらい作るべきか：アリストテレスの友愛論」のなかで考察した。以下、概略を述べる。

アリストテレスは友愛を三種類にわけている。一つは快を原因とする友愛であり、もう一つは有用性を原因とする友愛であり、第三は善を原因とする友愛である。このうち、善を原因とする友愛は、徳を身につけた善い人々たちの間でのみ成り立つ友愛であり、徳ゆえの友愛とも呼ばれる。

快ゆえの友愛と有用性ゆえの友愛の場合、相手からも快いものや有用なものが得られるという関係を前提としたうえで、相手のために相手にとっての善を望む。これは、ある意味では利他的な態度であるといえるが、快いものや有用なものという見返りが得られることが前提となっているため、厳密な意味では利他的な態度ではない。これに対して、徳ゆえの友愛の特徴は、自分のためではなく、もっぱら相手のために相手にとっての善を望む、という点にある。すなわち、そこには純粋な利他性がみられるのである。

有徳な人は友人に対してなぜそのように利他的にふるまうのか、またそのことは当人の幸福とどのようにかかわるのか、という点は、本研究では明らかにならなかった。そのため、この問いに答えることを通じて、現代の徳倫理研究に寄与することが今後の課題として残されることとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①相澤　康隆、「どのような友人をどれくらい作るべきか：アリストテレスの友愛論」、三重大学人文学部哲学・思想学系／教育学部哲学・倫理学教室『論集』、査読なし、第 17 号、2016、64-84

②相澤　康隆、「行為の起源と行為者の自由：アリストテレスの道徳的責任論における混合的行為をめぐって」、三重大学人文学部哲学・思想学系／教育学部哲学・倫理学教室『論集』、査読なし、第 16 号、2014、133-148

③相澤　康隆、「徳倫理学と正しい行為」、三重大学人文学部文化学科『人文論叢』、査読なし、第 31 号、2014、1-9

〔学会発表〕（計２件）

①相澤　康隆、「徳倫理学と正しい行為」、日本倫学会第 64 回大会、愛媛大学（愛媛県・松山市）、2013 年 10 月 4 日

②相澤　康隆、「徳倫理学とは何か」、三重哲学会 2013 年度総会・研究発表会、三重大学（三重県・津市）、2013 年 7 月 13 日

〔図書〕（計１件）

①立花　幸司（監訳）、相澤　康隆、稲村　一隆、佐良土　茂樹（翻訳）、『ケンブリッジ・コンパニオン　徳倫理学』、春秋社、2015、521(pp. 13-47, 79-107, 267-338)

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
なし
ホームページ等
なし

６．研究組織

(1)研究代表者
相澤　康隆（AIZAWA, Yasutaka）
三重大学　人文学部・准教授
研究者番号：４０６４７１２９

(2)研究分担者
なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
なし　　（　　）

研究者番号：